

[成果情報名]夏秋どりイチゴ立枯症の発生原因と防除対策

[要約]夏秋どりイチゴ立枯症は*Fusarium solani*-complexによる病害(未報告)である。本病は適正な施肥管理とダゾメット剤の使用により実用的な防除効果が得られる。

[担当]総農セ・栽培部・作物病害虫科・舟久保太一

[分類]技術・参考

[課題の要請元]

(旧)北巨摩農業改良普及センター

[背景・ねらい]

夏秋どりイチゴ産地(品種:エラン)において、原因不明の立枯症状が発生し問題となっている。そこで、本症状の発生原因を明らかにし、防除対策について確立する。

[成果の内容・特徴]

1. 本症は8月下旬頃から10月にかけて発生がみられる。症状は、下葉から枯れ、ひどくなると萎凋枯死する。根は黒褐変、クラウン周辺は黒変し、クラウン部を切断すると外側からの褐変が観察され、ついには内部にまで及ぶ(図1)。
2. 罹病植物から分離した菌を接種した結果、本症と同様の症状が再現され(表1)、分離菌は*Fusarium solani*-complexと同定された(図2)。本菌によるイチゴの病害は未報告である。
3. 本病害はエラン以外の品種でも発生する可能性がある(表2)。
4. 本病害は多肥条件により発病が助長される(表3)。
5. 土壌環境の改善とダゾメット剤処理を組み合わせると発病を抑制できる(表4)。

[成果の活用上の留意点]

1. ダゾメット剤は、イチゴでは萎黄病等で登録があるが、本病に対しては登録がない。
2. 罹病株は見つけしだいハウスの外に持ち出し、焼却処分する。

[期待される効果]

1. 本症状の発生原因が解明され防除対策が確立されることにより、夏秋どりイチゴの安定生産が図れる。

[具体的データ]



(株の萎凋症状)

(根の黒褐変症状)

(クラウンの外側から褐変)

図1 立枯症の各種症状



図2 分離菌 (*Fusarium solani*)

表1 分離菌の病原性 (接種)

菌接種の有無	供試株数	萎凋株数	再分離率
菌接種	10	7	100%
無接種	10	0	

(2006 年)

表2 各品種に対する病原性 (接種)

	品種	供試株数	発症株数
一季成り	章姫	15	3
	とちおとめ	15	5
	さがほのか	15	4
四季成り	紅ほっぺ	15	2
	かいサマー	15	4
	エラン	15	4

(2007 年)

表3 施肥条件と発病との関係 (接種)

施肥条件	供試株数	発病率%
多肥	30	46.7
標準	30	6.7

(2006 年)

多肥条件は標準の3倍量の肥料 (N,P,K) を施用。

多肥・菌無接種区では肥料障害は確認されなかった。

表4 現地発生ほ場における土壌改善及び土壌消毒剤による防除効果

試験区	調査株数	発症株率 (%)	EC値 (mS/cm)	硝酸態窒素 (mg/100g)
土壌改善 + ダゾメット剤処理	100	2.0	0.27	7.1
ダゾメット剤処理	100	10.0	2.72	123.5
無処理	100	23.0	2.18	98.9

(2005 年)

ダゾメット剤の処理時期は3月上旬で、処理期間は約1ヶ月間、その後ガス抜き。

土壌改善は湛水除塩により行った。

土壌のデータは植え付け前の4月14日に採取したもの。

[その他]

研究課題名：野菜・花きに発生する未解決症状の実態調査 (夏秋どりイチゴ立枯症)

予算区分：県単

研究期間：2004 ~ 2007 年度